

# 市民の笑顔に癒やされる日々



ながい  
長井市長(山形県) **うちやしげはる**  
内谷重治



5月に開庁した長井市新庁舎

市長に就任した頃は、市民の皆さまから「休日は何をしていますか」「趣味は何ですか」とよく質問をされました。新しい市長はどんな人なのか、人柄や性格はどうなのかと興味があったのだと思います。

私の答えは「子離れできない父親で、家族で温泉や花公園などに遊びに行くことが唯一の楽しみです」。われながら、平凡でつまらない男だなど思いました。

## 「地方の時代」に憧れて

私の生家は、当時減少していた専業農家で水稲・果樹が中心の、地域では経営規模

の大きい部類でした。しかし、父親は長男である私に農業を継がなくてもいいし、大学進学してもいいと言ってくれました。

高校では理系を選択し、地元にある国立の農学部進学を目指しましたが、迷った結果、私大の経済学部に進学しました。国際情報都市東京を肌で感じ、暮らしたいという憧れからです。大学での4年間は、刺激のかつ充実した日々で、卒業後は総合商社を目標に、就職活動を続けましたが、第一次石油危機から第二次石油危機直前ということもあり、厳しい状況でした。

そんな時、当時の神奈川県知事である長洲一二氏ながすかずしらによって提唱された「地方の時代」という言葉に、私は心を揺り動かされました。戦後日本は中央集権的近代工業化により、高度経済成長を達成し、国民も社会も物質的豊かさを得た一方、政治、経済、文化などの局面で行き詰まりました。この状況を打破し、人間復興の道を切り拓くには、地方を新しい目で見直すという理念が必要でした。

私はこの「地方の時代」という言葉に、東京一極集中や国際情報都市ではない、自分の生まれ育った地方にこそ活路があると確信しました。今思えば、自分の深層の部分で両親は言葉にしなかったものの、私に戻ってきてほしいという気持ちを感じており、それに応えるきっかけを探していたのだと思います。こうして私は方向転換し、



職員と共にまつりを楽しむ筆者

生まれ育った長井市を職員として変えたいと考え、長井市役所に入庁しました。

## 当時の市長への尊敬と市議会への危機感

本市は、山形県南部に位置する人口約2万7000人の小さな市です。旧米沢藩時代には最上川舟運の「山の港町」として繁栄し、鉄道や道路が整備された大正時代には長井紬つじなどの絹産地の利点を生かし、当時の長井町を挙げて郡是製糸ぐんせい(現ゲンゼ株式会社)を誘致、さらに戦時下には東芝を町予算の2年分に当たる公費をかけて誘致し、戦後、県内有数の工業都市となる礎を



リフレッシュには「市技」であるけん玉も(平成28年2月14日ギネス世界記録挑戦時)

創りました。農業が主産業の山形県にあって、独特の気風と歴史がある町だと思えます。昭和29年には長井町と周辺5カ村が合併し、本市が誕生しました。

私が入庁した昭和54年は職員400人弱に対して、過去最大の大卒17人採用という、まさに「地方の時代」を反映していました。最初に配属された農林課は花形部門でしたが、いわゆる前例踏襲主義で、保守的な職場でした。今思えば相当生意気な職員でしたが、良き上司に巡り合い、職員としての心構えや仕事の仕方を教わりました。市長となった今でも、当時の経験が役立っています。

その後、商工部門などを11年勤務し、地元企業出身であった齋藤市長の将来を見据えた地域戦略、市民目線での細やかな施策展開に加えて、本市を中心とした周辺自治体との広域行政の推進や、県内外でも注目されるハード整備を進める姿を見て非常に尊敬しました。その一方で、二元代表制の一翼を担う市議会は、尊敬すべき議員が徐々に引退するなど、一職員ながらも危機感を抱いていました。

## 改めて、東京から地方を見つめ、民間に学ぶ

市職員から地方政治に関わるこ

とを決断したのは30歳の時です。当時の齋藤市長が、21世紀の市役所を支える職員育成のプロジェクトチームを結成し、私が選ばれたことがきっかけでした。東京から経済、都市計画、まちづくりの専門家3名を招き、毎月数回2年間にわたる議論を重ね、21世紀のまちづくりデザイン計画を創るチームでした。研修中に2人の専門家から「将来、政治家を目指しているのだったら、私の会社で勉強してみるのも良いのでは」とお声掛けいただきました。両親や周囲は猛反対でしたが、幸い、妻の理解を得て、妻と4人の子どもと共に上京し、都市計画やまちづくりのコンサルティング会社と出版社で8年間、企画する、考える、創る、売ることを学びました。長女の高校進学を機に帰郷し、政治活動を始め、市議会議員選挙で初当選し、地方政治に関わることになりました。

## 市民の笑顔がまちづくりの原動力

市議会では、市民福祉の向上や地域経済の振興策を提言する議員がいる一方、さまざまな考え方の議員もおり、二元代表制を改めて考える機会となりました。

平成18年に市長の勇退に伴う新人4人の選挙で、初当選を果たし、今年で15年目を迎えています。私の就任時、本市は財政再建中で、実質公債費率が全国約1800市町村のワースト11位でした。平成24年によ

うやく普通の市町村並みの財政に戻りましたが、まさに乾いた雑巾を絞る過酷なものでした。私の仕事は、自分も含めた特別職、職員の給与削減と市内の各地域を回り、座談会、説明会を続けることでした。厳しい時に市民と真摯に向き合ってきたことが、信頼していただいている原点だと思います。

現在は、市長就任時に構想したビジョンに基づき、市民や市議会議員の皆さま、職員の協力を仰ぎ、一歩ずつではありますが力を結集し、未来への責任を果たすべく努力しております。私にとって、仕事とプライベートが充実したまちづくり、そして、市民の笑顔が最大の癒やしです。



執務室内にて筆者近影